

2. 最近の研究成果トピックス

人文・社会系

中央アナトリアの『文化編年』を通して 製鉄の起源を探る



(財)中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所 所長
大村 幸弘

【研究の背景】

(財)中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所は、東西文明の接点とも言われるトルコ共和国のほぼ中央部に位置するカマン・カレホユック遺跡で、1985年以来発掘調査を行なってきました(図1)。この調査は、カマン・カレホユックに重層する約一万年にわたる諸文化の変遷過程を辿ることにより、トルコ共和国における『年表』を作成すること(『文化編年の構築』)を目的としています。

【研究の成果】

これまでの発掘調査では4文化層—I層、オスマントルク時代、II層、鉄器時代、III層、中期・後期青銅器時代、IV層、前期青銅器時代—を確認しており、各文化層からは膨大な遺物が出土しています。これまで欧米が構築した『文化編年』では、鉄器時代は前12世紀、つまり、アナトリア高原の中央部を中心にヒッタイト民族が作り上げた一大帝国が崩壊したと同時に開始したと言うのが通説でした(図2)。しかし、カマン・カレホユック発掘調査では帝国時代の文化層から鉄製品が出土してくると同時にその中に切れ味の鋭い『鋼』が含まれていたこと、さらに帝国時代の直下に位置するヒッタイト古王国時代、その下の前20~18世紀のアッシリア商業植民地時代の層からも鉄製品が出土してきており、『鉄器時代』はヒッタイト帝国以降と言う通説が大きく変わることが明らかになってきました(図3a, b)。現在、カマン・

カレホユック遺跡発掘調査では、前3千年紀末から前2千年紀初頭まで掘り下げっていますが、その文化層からも『鉄製品』と同時に『鉄滓』が確認されています。この事実は、間違いなく前3千年紀末から前2千年紀初頭にカマン・カレホユック遺跡で製鉄が行われていたことを示唆しており、その結果、鉄器時代の開始時期も定説より千年近く遡る事になります。

【今後の展望】

考古学を研究する上での基本中の基本である古代中近東世界の『文化編年』の構築は、これまで欧米の研究者のみが行ってきたと言えます。我々の研究成果は、鉄器時代の『文化編年』の再構成をせまるものです。

今後は、カマン・カレホユック遺跡の残りの先史時代の約6千年間分を欧米、トルコ、アジアの研究者と共同、且つ学際的に行き、印欧語族の移動経路、移動時期等の未解明部分に焦点を合わせたいと思います。

【関連する科研費】

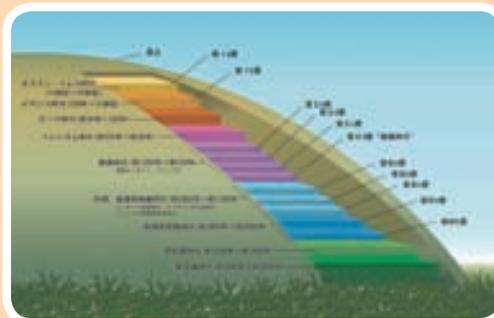
平成9-11年度 基盤研究(A)「アナトリアの古代遺跡出土遺物の産地推定」

平成14-18年度 基盤研究(S)「古代アナトリアの文化編年の再構築—カマン・カレホユックにおける前2-3千年紀の文化編年—」

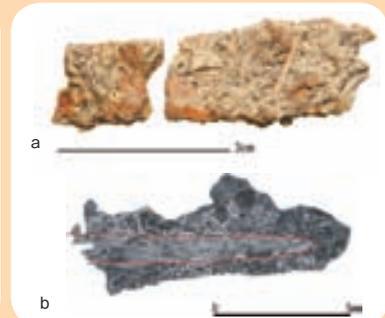
平成22-26年度 基盤研究(S)「アナトリアに於ける先史時代の文化編年の構築」



▲図1 カマン・カレホユック遺跡2010



▲図2 カマン・カレホユックの文化編年



▲図3 a 出土した鉄製品
b 断面図(X線透過写真)